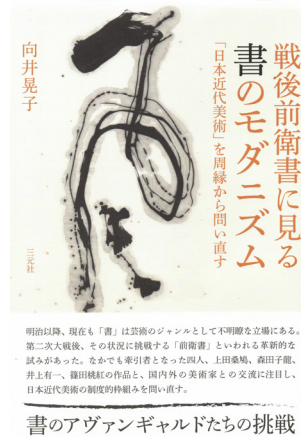


向井 晃子
Akiko MUKAI

I 単著『戦後前衛書に見る書のモダニズム—「日本近代美術」を周縁から問い直す』
2022年、三元社。



II 内容紹介

2022年に出版された拙著は、昭和初期に萌芽が見られる革新的な書の試みである前衛書をテーマに、「日本近代美術」という制度を検討した美術史研究である。日本では一般的に、書と美術は異なる分野と理解されており、書を美術史の枠組みで扱う研究の蓄積も比較的少ないが、そこには日本で近代に設定された美術制度が影響している。一方、海外ではその垣根は日本での様子と異なっている。例えば、2017年にアメリカのシカゴ大学で、シンポジウム“Writing and Picturing in Post-1945 Asian Art”が開催され、アジアの戦後美術の範疇で前衛書が検討されている。あるいは、芸術大学において中国や台湾では書の学科の設置が見られるのに対して、日本にそれではなく書を大学で研究するには教育学部や文学部を選択せねばならない。なぜ、日本ではそのように書と美術の扱いは大きく異なっているのだろうか、そして、そのような制度の下で、革新的な書に挑戦した作家たちはどのように活動したのだろうか。

本書ではそうした問いに対して、明治以来の美術制度における書の立場を跡づけ、戦後に隆盛した前衛書に注目し、その創始者的存在である上田桑鳩と、美術と積極的に交流した森田子龍、井上有一、篠田桃紅の四名の作家を取り上げ、「書のモダニズム」という観点から検証した。彼らと彼女の1960年代までの作品を分析し、活動と受容を検討している。以下に、各章を簡単に紹介する。

序章：本書の研究の枠組みと「書のモダニズム」の定義を述べ、次に明治から大正期までの美術制度の変遷と書の立場を跡づけた。明治期に欧米の美術を基準に美術制度が設定された際、それまであった「書画」の美的価値観が「書」と「絵画」に分離されるいわゆる「書画分離」が行われた。そして「絵画」が美術制度の中心に据えられる一方で、「書」は周縁化されたのである。その後、明治後期から大正にかけて、日常生活での毛筆の使用機会は減少していった。また、近代的な印刷技術が社会に

普及し、その結果、競書雑誌という、出品券をつけて課題を投稿すると審査がなされ、段や級の評価が与えられる仕組みの書道雑誌が流行した。美術制度に入らなかった書はここで「習い事」として社会に場所を得た。またこの時期には、展覧会が開催されはじめ、書は官展には入らなかったものの民間の場で展示され、鑑賞されるようになったのである。

第一章「上田桑鳩と『現代の書』－『書のモダニズム』の萌芽」：ここでは、戦前に上田が中心となって結成した書道芸術社での革新的な書の試み、そこからつながる戦後の活動、革新的な書の試みを推し進めた上田の作品分析と受容、晩年の新たな試みなどを取り上げている。戦後によく日展に書部門が開設されたが、日展での書の立場を巡って、保守的な書家と革新的な書家の対立が起こり、上田は日展を脱退した。しかし晩年まで、上田はさらなる書の探究を進めたのだった。ただ実は、日展をめぐる書家たちの対立の背景には、美術制度の影響が見られるのである。

第二章「森田子龍の『時間性』－美術との交流と戦後の『書画再分離』」：森田は、雑誌『墨美』を創刊し、その表紙にフランツ・クラインの作品写真を掲載したことで美術関係者にも知られている。ここでは、森田が戦後に編集した雑誌『書之美』と『墨美』、1950年代の関西美術シーンでの前衛書も含めたジャンルを越えた作家たちの交流、同時期に開催された海外での書の展覧会、書の海外巡回展の責任者であった国立近代美術館次長の今泉篤男の前衛書への協力と書の「純血」発言、森田の制作における新たな素材の探究、そうした作品と独自の書論との関わりといった内容を執筆している。書の海外巡回展に際し、お披露目の展覧会が国立近代美術館で開催された。ここで書はようやく、同時代の作品として、国立美術館の学芸員から評価され、美術館で展示されたのだった。しかし、今泉の書の「純血」発言は、書と美術が接近した状況下での「書画再分離」とも言えるもので、書が芸術として同時代の美術制度の中に位置づけられることにはつながらなかった。

第三章「井上有一の『脱技術』－美術との交流と新たな墨の開発」：国内外でよく知られている井上だが、初期の歩みはこれまでさほど注目されていない。しかし、その時期に井上は美術へも関心を寄せており、本書にとっては見逃せない。ここでは「脱技術」をキーワードにして、上田に入門していた井上の初期のデビュー作、画家の長谷川三郎との交流、具体美術協会の吉原治良とも交流した時期の異素材を用いた非文字の制作、そこからの文字への回帰と新たな墨の開発といった展開に注目して論じた。つたなく感じられる書きぶりが魅力の井上作品は、書を芸術として扱うことで日本の美術制度を問い直すだけでなく、習得した筆遣いを用いて文字を書く「手習い」として位置付けられた日本近代の書の立場をも問い直している。

第四章「篠田桃紅による『同時代の書画一致』－多分野へにじむ活動」：書から活動を始め美術へと進出した篠田は、百歳を過ぎても活動を続け、2021年に逝去した折には大手メディアでも彼女の訃が報じられた。ここでは、篠田の最初期からの活動を、「同時代の書画一致」という観点から執筆した。伝統文化と現代生活の接続に目が向けられた初期の著作、キャリアを決定づけた戦後早い時期での渡米、帰国後の多方面での活動といった点に目を向けている。書が美術として扱われなかった日本国内の状況を、篠田は多方面で多様な活動を行うことで、ポジティブに乗り越えている。

終章：本研究の検証の結果を述べるとともに、「美術」の概念が多様化し美術研究も進んだ今、検証した「書のモダニズム」がどのように歴史的に位置づけられるかを考察した。

本書では、書という伝統芸術の分野に起こった新たな試みを、日本社会の近代化との関連も交えて検討した。書や美術の観点に留まらず、日本社会の近代化の一側面というような視点からも、幅広い読者層に楽しんでいただけると幸甚である。